

延慶本『平家物語』に見る平重衡往生譚

石 澤 侑 子

はじめに

『平家物語』（以下『平家』）において、合戦に敗れた平家の武将たちの最期に共通することは、皆一様に念仏を唱えていることである。武士である限り殺生は避けて通れないが、それでも成仏したいという思いから、彼らは仏教にすがらざるを得ない。罪を贖い往生したいと望む心が、彼らに仏教を信仰させるに至ったといってもよい。戦うことを義務づけられた彼らは、祈ることによってその罪悪感を軽減させたのである。

彼らの中でもとりわけ仏教による救済と密接な関わりをもつ人物が、平清盛の五男、平重衡である。正三位左近衛権中将までのほりつめた彼は、明朗な人柄で周囲からの評判も高かったが、平家が没落すると一族とともに西走、治承四年一二月に、東大寺・興福寺を焼討し、その後の寿永二年閏一〇月の水島合戦、一一月の室山合戦で源氏方を撃破するなど、多くの戦で功績を残した。翌年二月の一ノ谷の戦いで、乳母子後藤兵衛尉守長の裏切りによって捕虜となり、鎌倉に送られたが、源頼朝にその潔さと風流さを評価され、一年あまり歓待を受けた。しかし文治元年六月二三日興福・東大両寺宗徒

の要求で南都へ連行、「仏敵」と称された重衡は、泉木津で処刑された。

このように活躍と凋落の二点を持つ彼であるが、平家一門の隆盛から末路までを描く『平家』は、彼を高く評価しない。『平家』に登場する武将の多くはいわばキャラクター化され、必ずしも史実通りに描かれない。たとえば『平家』において清盛は、横暴な悪の権化として登場するが、『十訓抄』『保元物語』『平治物語』にあらわされるように、実際は「いみじかりける」人物であった。あるいはその長子重盛は横暴で短気な人間であるにも関わらず、物語中では聖人君子として描かれる。『平家』における、『伝奇』は（歴史語り）に展開した数々の『所業』の副産物¹⁾であり、史実とはまったく異なった形で武将を「装置として」扱い、意味を担わせているのである。殿下乗合事件の首謀者は重盛であるが、清盛による暴行と改竄されたのも、その例である。

重衡の「人物」像の研究はいままで多くなされてきたものの、「役割」は論じられてこなかった。何故実際に戦功をあげた戦いの記述がないのか。彼を高く評価する記事が『平家』には存在しないのか。以下でその理由と、仏教と彼がどのように関わったのかについて述

べたい。なお、本論では特に断らない限り、古態を多く留めるとされるテキストである延慶本を用いる。

第一章 重衡と「運命」

『平家公達草紙』は重衡について「かたちもいとなまめかしく、きよらなりけり」「人の歎くことなどおしはかり、宥め申しなどしければ、人もありがたき事に悦びけり」と語り、『建礼門院右京大夫集』には、建春門院追善の法華八講がなされた際に、建礼門院の御捧物を重衡と維盛が捧げ持った話や、彼が宿直の番の夜に女房をからかに行ったエピソードも綴られる。建礼門院右京大夫は重衡とも親しかつたため、同書に南都焼討に対する批判的記述は見られない。また、鎌倉幕府の史料である『吾妻鏡』でも、重衡は極悪人として扱われない。元暦二年六月七日条では、

彼は過つて朝敵となり、無位の囚人なり。(略)ただ露命を救はしめたまはば、出家を遂げ佛道を求めんの由と云々。これ將軍四代の孫として、武勇を家に稟け、相国第二の息として、官祿意に任す。しからば武威を憚るべからず、官位を恐るべからず。なんぞ能員に対して禮節あるべけんや。死罪さらに禮に優ぜらるべきにあるざるか。観る者彈指すと云々。

として、むしろ好意的である。

一方で、九条兼実の『玉葉』は重衡の南都焼討に関して、「凡非言語之所及」(治承四年二月二十八日条)「仰下賊首可懸獄門樹之由」(元暦元年二月一三日条)と憤怒をこめて記す。南都焼討の実行者である重衡は、仏徒である兼実は勿論、南都大衆の憎悪の対象であった。重衡をどのように処刑すべきか協議する場面に、「のこぎ

りにてやるべき、堀頭にやすべき」(『平家』巻一一「重衡被斬」とある程である。

勿論、当時の大衆らが気性荒く、政治に介入するほどの武力を有していたことは事実である。反平家勢力の巢窟ともいべき三井寺は、以仁王の乱にも多大な影響を及ぼしているし、興福寺・東大寺もそれぞれ摂関家の氏寺という立場を利用して、以前より平家と対立関係にあったことも考慮すべきであろう。こうした状況下、南都焼討が更に反平家感情を強めることとなり、総大将であった重衡にそのすべてが降りかかってきたのである。

冒頭に代表される無常観、運命観はあまりにも有名であるが、『平家』の運命観は仏教のみならず『文選』の影響も強く受けている。同書で「運命」を主題にしている巻五二班叔皮の王命論、巻五三李蕭遠の運命論、巻五四劉孝標の辯命論は、漢民族における天命思想に基づき、人の死生は「運」によって定められ、決して抗うことは出来ないとする。『文選』は日本では奈良時代より教養書として読まれたから、この概念は当時の貴族の間では自明のことであった。

『平家』でも「運」ということは頻出し、それが物事の転換地点になっている。清盛だけでなく、先帝と壇ノ浦で入水をした二位殿も、「悪縁にひかれて、御運すでに尽きさせ給ひ」(巻一一「先帝身投」)たと語る。

平家は去去年小松大臣薨ぜられぬ。今年又入道相国失給ひぬ。運命の末に成る事あらはなりしかば、年来恩顧の輩の外は随附く者無かりけり。(巻六「州俣合戦」)

君既に都を出でさせ給ひぬ。一門の運命はや尽候ぬ。(巻七「忠度都落」)

入道の悪行超過せるに依つて一門の運命既に尽んずるにこそ。

(卷三「無文」)

ここに使われる「運命」とは、清盛自身の運命であると同時に平家一門の運命でもある。

清盛は強大な「力」を持った一門の指導者として、卷二「教訓状」で成親や西光などの「悪人」を「御運尽きざるによつて」排除していく。同時に卷六「祇園女御」に清盛の天皇落胤説を盛り込むことにより、彼の存在が一般からはかけ離れた、異質かつ特別なものであると印象づけられる。こうして彼は、「力」を実行しうるただ一人の人物として確立される。卷五「物怪之沙汰」も同様であろう。源雅頼の青侍の夢に現れる神々が、頼朝の挙兵を肯定したことで、行為・存在自体が「神によつて認められたもの」となり、人智を超えたものの、「天命」によつて正当化されるのである。

しかし清盛の「力」の方向が、悪にばかりむき始め、「人間の身でありながら、天賦の力の持ち主なるが故に、神仏を無視する。つまり自分は神仏以上の力をもっている」と錯覚を起²⁾こすと清盛以下平家一門の「御運」は尽きる。すなわち『平家』での「運」「運命」とは、因果応報、栄枯盛衰の精神に基づいて扱われ、人間の力ではどうすることも出来ない「天」の力、超然的な力によつて行動せしめられるのである。

ところが『平家』が重衡を語る際に、「運」という言葉は使われない。彼は南都焼討の「報い」を受ける。因果応報である。本来「報い」には仏教的な意味合いが多く含まれるが、重衡の場合には「人」に裏切られ「人」に捕らえられるという、人為的な要素も強く含まれている。

乳母子でありながら重衡を裏切った後藤藤兵衛尉守長は、重衡が頼みにして替え馬に乗せていた人物であるが、

主は深く憑み給へる侍なりけれども、童子鹿毛に矢立ちぬと見て守長は、我が馬召されなば我如何せんと思ひて、主を打ち捨て奉り、射向の袖の赤符かなぐり棄てて、西を指して落ち行きけり。三位中将は、「如何に守長、其の馬進らせよ。」と仰せけれども、空聞かずして馳せ行きけり。「あな心憂しや、年来はかくやは契りし、重衡を見棄てて、いかに、守長いづくへ行くぞ、留れ守長、其の馬進らせよ。」と宣へども、耳にも聞き入れず見も返らず、渚に添うて馳せ行きけり。(卷九「重衡生捕」)

と、主人を見棄てて逃げてゆく。当時、乳母子と養君の關係は非常に密接であり、卷一一「内侍所都入」の平知盛と伊賀平内左衛門家長、卷九「木曾殿最期」での源義仲とその今井兼平のように、乳母子と養君が一心同体で生死をともしすることも稀でない。しかし重衡は守長に裏切られた上、自害するところを捕らえられ、武士らしく死ぬこともかなわない。勿論これは史実ではあるが、『平家』作者は重衡に武士としての尊厳を与えない。

就中に南都炎上の事、王命と言ひ武名と言ひ、君につかへ世に従ふ法遁れがたくして、(卷一一「戒文」)

いま重衡が逆罪ををかす事、まったく愚意の発起にあらず。只世に随ふことわりを存斗也。命をたもつ物、誰か王命を蔑如する。生を受くる物、誰が父の命をそむかん。(卷一一「重衡被斬」)

重衡は「南都を焼いたこと」は「王命」、「父命」によるものであ

り、これらの命に背くことなど生きている限り出来ない、と述べる。風に吹かれたために伽藍に火が移り、焼き討ちに至ったというこの事件は「父命」によるものであり、「運」によるものでは到底ない。重衡の行為は「天」によってではなく、清盛ら「人間」の力、采配によって支えられているのである。さらに重衡はこのあと、「頼朝に」その生を承えさせられ、「南都大衆によって」斬首されるという、人為的な運命を辿ることになる。

すなわち『平家』内での重衡は、行動から生死にいたるまで、超然的な「運」ではなく、「人間的な」命令によって支配されているのである。「天」の力は及ばない。「御運」という言葉は、源氏の台頭に伴い少なくなり、巻一二「六代被斬」で「是程運命尽きはて候ぬるうへは、とかう申に及ばず」と平家の侍薩摩中務家資が発言するまでは、ほとんど現れない。源氏の世になってからは、「運」に匹敵する力は、平家に代って台頭してきた源氏が有することになったためであろう。

第二章 重衡と仏教

処刑の決った重衡は、せめて出家をと願うが、それが難しいとわかれると、浄土教の開祖である「黒谷の法然房」との面会を望む。

今日明日とも知らぬ身のゆくゑにて候へば、いかなる行を修して、一業たすかるべしとも覚えぬこそ口惜しう候へ。倩一生の化行を思ふに、罪業は須弥よりも高く、善根は微塵ばかりも蓄なし。かくてむなく命終わりなば、火血刀の苦果あへて疑なし。願はくは上人慈悲をおこしあはれみをたれて、かかる悪人のたすかりぬべき方法候はば、しめし給へ。(巻第一〇「戒文」)

これに対して法然も「涙に咽び」ながら、

それについて出離の道まぢまぢなりといへども、末法濁乱の機には、称名をもつて勝れたりとす。心ざしを九品にわち、行を六字につづめて、いかなる愚智闇鈍のものも唱ふるに便あり。罪ふかければとて卑下し給ふべからず。十悪五逆廻心すれば往生をとぐ。

と重衡の逆修を行った。

実際に法然が重衡に逆修を授けたかどうかは断定出来ないが、『法然上人伝記(九卷伝)』でも同様の記事が見られる。『九卷伝』以前の法然伝においては法然と重衡との対面の記事がないことに加え、覚一本の「戒文」に見られる教化の内容が現存する延慶本に残されていることから、この記事は延慶二年以前にはすでに出来上がっていたであろうし、そもそも長門本や盛衰記からの発展であろう。

『平家』『九卷伝』で名を上げられ、法然によって戒を授けられたことになっている重衡ではあるが、重源との関わりについても目を配る必要がある。

法然が念仏の勧進を行ったのに対し、重源は社会事業を行う勧進聖として活躍した。彼の半生について詳しいことは不明だが、平家武將の弔いや、重衡によって焼かれた東大寺の勧進なども行っている。『黒谷源空上人伝』、『盛衰記』によれば、後白河院は東大寺復興の責任者として法然を指名したものの、法然は辞退し、その際に自分の代わりとして重源を推薦したらしい。類似記事が「勅修御伝」第三〇にも見られるが、裏辻憲道氏は「しかし最初の法然上人伝と思われる『源空聖人私日記』には、この勧進職推薦に関する記事が

全くないことは注目すべきである⁽³⁾と指摘する。嘉禎三年成立の『本朝祖師伝記絵詞』（伝法絵）第二には、

治承四年二月一日、平家乱逆の時、東大寺炎上の庭に、旧跡にまかせて、大仏治鑄し奉るべきよし、右大弁藤原行隆朝臣奉行にて侍りけるに、昔、一天四海の民土にすすめて御建立侍りける。今度も、勸進をやつけ侍るべきよし、勸答申しければ、先例にまかすべきよし、宜くだされける刻、奉行弁、秘に法然上人に、御勸進待なんやと、内儀の返答に、源空は、勸進のうつは物に非ず、同行修乗房に申合べき状はからひて、彼上人に、被二召仰一侍けるところ。

とあり、藤原行隆に勸進を打診された法然が固辞した結果、重源にその役が回ってきたとする。しかし重源は『平家』に「大仏の聖」として二度しか言及されない。「重衡被斬」で、重衡の北の方大納言典侍は「頸をば大仏の聖俊乗房にとかく宣へば、大衆にこうて日野へぞつかはしける」と重衡の首を重源に所望しているから、恐らく彼らの間には何らかの交流があったであろうが、逆修の戒師が重源ではなく、法然とされることに『平家』作者の意図があらう。

戒師が法然である必要性、それは先ほどの重衡の「報い」と密接に関係している。重衡には「運」ではなく、自分の行為によって受けた「報い」しか残っていない。

清盛の四男重衡にあつては、源氏方に捕らえられ死刑を直前に控えて、眼をあのお世へと向けた時に、あのお世に価しないおのれを自覚せねばならなかった。武士としてのおのれの過去が、⁴「罪」という別の意味を持ち始めるのである。ことに、王命・武命のままに南都を消亡ぼした、そのことが。

『善業は微塵ばかりも蓄へなし』という彼の言葉は、自ら積み上げたところの善根功德によって、往生極楽を購いとうとうという自立的・功德主義的浄土教の立場を反映するものである。（略）自立的・功德主義的浄土教の立場に立つかぎり、重衡の救済はあり得ない。重衡の苦悩は、自立・功德主義の限界を示していた。

と渡辺貞麿氏が述べるように、自分の「罪」を処刑までに帳消しにできるほどの徳を積むことが不可能であると理解すると、仏教に頼らざるを得なかったのである。

それでは彼は、果たして成仏出来たのか。

『平家』内で仏罰により地獄へ行ったとされるのは清盛だけである。清盛に対しては夢で牛頭馬頭が訪れ、あやかしが現れるなどの怪異が起るが、重衡に対しては、敵方に捕らわれる屈辱が待ち受けていただけで、延慶本では地獄を連想させるものは現れず、「高声で」阿弥陀仏の手から伸びる五色の糸を引きながら、念仏を唱えつつ斬られたとあるから、ここで一応の往生が果たされたと考えられよう。さらに「盛衰記」では、西に向う郭公や、「紫ノ雲一筋出来タリ」という極楽浄土を連想させることばを用いているから、重衡はやはり往生を遂げたのである。大にその死体を漁られるというおぞましい記述もある一方で、右のような描写を挿入することで、罪人として斬られる重衡に対してのせめてもの救いとしたのだろう。

第三章 重衡と女人

鎌倉で頼朝に命じられ、重衡の接待をつとめた千手前、内裏女房、正妻である大納言典侍、「盛衰記」に限られるが重衡の北の方とさ

れる髑髏尼など、重衡は多くの女性と関わりを持つ。次にその点について確認したい。

一 千手前

千手前はもと頼朝に仕えていた官女であることが、

其の後、秉燭之期に及び、徒然を慰ん爲と稱し、藤判官代邦通、工藤一萬祐經並びに官女一人「千手前と号」等於羽林の方へ遣はれる。

『吾妻鏡』元暦元年四月廿日条から読み取れる。重衡の接待を申し付けられた千手前は、相手が捕虜と知りながらこころひかれ、一夜妻としての世話を行うが、重衡が斬られるとこれを嘆いて出家した。そして長野の善光寺で重衡の菩提を弔い、のち彼女自身も往生したと『平家』覚一本には書かれる。しかし実際は、

今晩千手前卒去（年廿四）、（略）前の故三位中将重衡参向の時、不慮に相馴染み、彼の上洛の後、恋慕の思い朝夕休まず、憶念の積もる所、若しくは発病の因と爲るかの由人これを疑うと云々。（『吾妻鏡』文治四年四月二十五日条）

千手前が重衡の菩提を弔って往生したことについては延慶本に記述が見られないことから、このエピソードは後に付け加えられたのであろう。その意図するところは何か。

千手前についての『平家』諸本の記述は異なるが、『吾妻鏡』では官女・女房とするのに対し、『平家』は駿河国手越の宿の長者の娘としている。遊女は芸能によって鎮魂を行い、「仏御前」「祇王」などの名からもわかるように、仏やそれに順ずるものの名を名乗る。「千手前」の名も千手観音によるものであろう。彼女を遊女と扱う

ことによって、往生への導きを可能にするのである。重衡は「罪人」であるがゆえに、彼を救済しようとする力もそれに匹敵するだけのものではなければならない。

千手前が重衡の菩提をとぶらい、我が身も往生を遂げる女性として選ばれたのは、彼女が手越の長者が娘、という芸能者であつたことと関わりがあるであろう。それは曾我兄弟に対して大磯の虎が要請されたのと似ている。⁵⁾

と服部幸造氏が述べるように、後から千手前往生譚が付け加えられたのは、彼女の役割が「芸能者として」重衡の往生を手伝うためであつたのだらう。

二 内裏女房

内裏女房は重衡とかつて交友のあつた女房で、重衡が六条大路を引き回された際、重衡の家人であつた馬右允知時らのはからいにより、面会をはたした人物である。

されば中将、南都へわたされて、きられ給ひぬと聞こえしかば、やがて様をかへ、こき墨染にやつれば、彼後世菩提おとぶらはれけるこそ哀れなれ。（巻第一〇「内裏女房」）

と、重衡が斬られたことを聞きつけると、重衡の菩提を弔うために出家している。

三 大納言典侍

重衡の北の方である大納言典侍藤原輔子は、安徳天皇の乳母として治承三年の天皇即位により大納言典侍に任命された。寿永二年七月、彼女は夫重衡や安徳天皇とともに西海に下向するが、壇ノ浦合

戦で捕虜となり、夫が処刑されたのちはその首を求めて泉木津へ赴き、茶毘に付した。灌頂卷「大原御幸」では出家した建礼門院に仕え寂光院で仏事を営むが、大納言典侍が「往生の素懷」を遂げたのは、夫重衡の菩提を弔ったからではなく、阿波内侍とともに建礼門院の仏事を営んだためである。たしかに「形のごとくの仏事をいとなみ、後世をぞとぶらひける」(巻第一二)とあるから、彼女は夫の弔いをしたことは事実だが、弔いの記述は少ない。本妻であるにも関わらず、建礼門院の女房として平家一門の菩提を弔ったことにウェイトが置かれている。それはなぜか。

安徳天皇の乳母であった大納言典侍には、建礼門院とともに安徳天皇の菩提を弔う義務があった。彼女にとって建礼門院は義妹であり、また養君の実の母親であったのだから、強い精神的な結びつきがあったろう。もともと大納言典侍は藤原家の人間であるが、壇ノ浦の合戦で二位尼や安徳天皇が入水したことを知るや入水を試みるほどであるから、平家の人間として、また乳母としての自覚があったのだらう。このときもう一人の乳母である帥典侍が入水しなかったことが実に対照的である。大納言典侍にとって、安徳天皇をはじめ平家一門の菩提を弔うことは、「義務」以上の意味があったのだらう。

四 髑髏尼

髑髏尼という女も重衡に関わってくる。「盛衰記」に「本三位中将重衡卿の時々通ひ給ひし女房」(「北條上洛平孫を尋ぬ附髑髏尼御前の事」とあるが、この髑髏尼説話は長門本・延慶本・「盛衰記」に限られており、また長門本・延慶本についてはその内容はほぼ同一であるが、「盛衰記」は上記二本と異なる部分を持つ。

(一) 尼の出家の戒師となった上人は上記二本では本成房湛敷とされるが、「盛衰記」では阿証房印西とされる。

(二) 上記二本では尼は平経正の北の方であるが、「盛衰記」では重衡の北の方である。

(三) 上記二本では、尼の、四天王寺の海における尼の入水往生の話でもって終わるが、「盛衰記」では印西によって尼がのちに供養されている。

注目したいのは(一)である。灌頂卷の建礼門院の出家の際にも同じことが起きており、「今日建礼門院有御通世。戒師大原本成房云々」(「吉記」元暦二年五月一日条)や「吾妻鏡」文治元年六月廿一日条とも記述を異にするなど、戒師が湛敷から印西にすり替えられているのである。前章で述べた法然と重源の意図的なすり替えにと同様の作為がここにも見られる。では、何故すり替えが起こったのか。

これには思想的な問題も多分に含まれていると考えられるが、法然の取り巻きのひとりである印西を登場させることにより法然の功德をより強固にする意味があったらう。「盛衰記」で「智恵第一」の法然と対照的に、「慈悲第一」と称される印西であることに意味があるのである。

「盛衰記」における髑髏尼の話の上述の如き構想からすれば、その話は、長楽寺および印西その人の念仏を宣揚するという傾向を強くもっているかと判断できる。この「盛衰記」に見られる傾向と関連させて考えねばならないのが、若君の父親について、「長門本」は経正としているのに対して、「盛衰記」がこれを重衡としている事である。ここに、南都諸大寺を焼亡ぼした極重

悪人重衡の名を持ち出したのは、そのことによって、逆に長樂寺および印西その人の念仏の滅罪の功德を強調せんがためである。⁽⁶⁾

と渡辺氏が述べるように、「重衡の救済を第一に考えた」というよりも、印西らによる、自分たちの名声を高めるための改作である可能性が高い。

『左記』や『山槐記』によれば、印西は建礼門院着帯のおり、祈祷師の一人に選ばれているし、また、安徳天皇の菩提を祈るための仏事にも名を連ねている。それは彼が先帝の弔いを行うべき、選ばれた人間だという、社会的權威をしめすことでもあった。このように、戒を授ける上で、建礼門院に近しくあった印西らが権力誇示の方法の一種として建礼門院の名を借りて『平家』を改竄するに到り、鶴亀尼の例にまで手を加えたのではないか。これら戒師の入れ替えは、平家一門側からの視点ではなく、僧侶側の利益を追求したものである。

終章

古態である延慶本では、重衡の往生に対する意識があったようには考えられない。延慶本段階で重衡の往生が可能であったならば、多くの女性が重衡の回向を願って仏門に入る意味やその必要性が薄れ、これより成立年代の遅い諸本で重衡を救済させようとする動きも起こりえないからである。

重衡救済の動きについて「法然側からの働きかけ」と前述したが、それだけではなく、重衡自身の「役割」にその理由があるのではないか。『平家』では、章段を意図的に配置していることが多く見ら

れるが、「重衡被斬」は、『平家』のなかでどのような位置にあるか。「重衡被斬」は巻一一の最終話として配置される。最終話は巻全体の流れを受けた上で、まとめ・一区切りの意を持ち、あるいは次の巻への足掛けをしており、巻の最終話には、間の話にはない、重要な役割があるといえよう。

灌頂巻を除く最後の巻、巻一二「大地震」は「平家みなほろびて、西国もしづまりぬ」で始まる。つまり、巻一二最終話「重衡被斬」までで平家は滅びたと捉えられているのである。実際は、建礼門院や維盛の嫡男六代らが生き残っているから、「みな」というのは誤りであるし、「それよりしてこそ、平家の子孫はながくたえにけれ」として「六代被斬」で初めて平氏は断絶するのである。

重衡は位が大変高いわけでも、清盛の嫡男でもないが、巻一〇の前半が彼のために割かれ、また、巻一一の最後を飾るにふさわしい人物として選ばれたのは、それほどまでに彼に知名度があったことを表している。僧侶たちは重衡のエピソードを利用することによって、民衆たちに往生の信憑性を喧伝したのであろう。

『平家』において清盛と重衡がともに語られる場面は多くないが、南都焼討の罪を負って死んだのはこの二人だけである。清盛の死因は史実として「あっち死に」だが、『平家』はそれを南都を焼いた罪によるとした。重衡も同じ罪で斬首された。本来の善人たるさまを取り上げず、悪人としての所業を大々的にアピールされるところも共通箇所として指摘できる。

言うなれば、重衡は清盛の後任者的存在だったのではないか。清盛亡きあと、平家の「運」が傾き没落していく一部始終を、彼は鎌倉に身を置くことによって客観的に観察することもできた。いわば

傍観者の立場に重衡はあったのである。自ら戦場に赴くことになった清盛と同様、一門の行く末を見届ける役目が担わされていたであろう。

重衡がこの役目を担うべきは、彼が「悪人」であるからである。多く生き残った平家公達の中で、「悪人」と称された清盛の代わりに、一門の命運を見守ることが出来たのは、「極悪人」と呼ばれた重衡だけだったのである。また、清盛は平家一門全体の象徴でもあるから、重衡にさらに「一門」が付加されていたと理解できよう。

そのため、重衡の死とともに平家は「みな」亡びたとされたのではないか。巻第一〇「請文」で、院が三種の神器との交換を要求するのは重衡である。これは宗盛らによって最終的に却下されるが、神器の交換を持ちかけられるほどの価値が重衡には付されており、宗盛たちは一族の者の命を見棄てることによって、自らの運をも棄て、結果として平家は滅亡するのである。だからこそ、重衡は惨めな死を迎えなければならない。『平家』が彼の武功語らないことや、『盛衰記』の露骨的な描写も、これを追求した結果であろう。

また、奈良坂に頸が晒されたことについては、『玉葉』に「伝へ聞ク、重衡ノ首、泉木津辺ニ於テ之ヲ切り、奈良坂ニ懸ケシム」（元暦二年六月二三日条）とあり史実との齟齬はないが、当時の奈良坂は葬送の地であり、遺骸の運搬・埋葬をする坂者が住んでいたことにも注目したい。非人集団の生活居住区で頸を晒したことも、南都大衆の悪意があるう。そもそも正三位以上の者が処刑されることなどありえない時代である。重衡は丁度この位であったが、横井孝氏が、

〈三位中将〉は、その出自ゆえに「中途の官」であることは、

かえって将来の栄進を約束された輝かしいイメージを重衡の造詣のうちに仮設する。政情の不安と運命の皮肉がなければ、「正三位右近衛権中納言兼但馬守平朝臣重衡」という署名が誇らしげであるのは故なしとないし、裏腹な後半生の転落と相対化されるものでもあつたらう。

と述べるように、栄達の中途の階級として捉えられていた感が強い。

第一章と照らし合わせて考えれば、神Ⅱ天によって加護が約束され『平家』内で神格化された頼朝に対し、「人間」に支配された人物として扱われる重衡が『平家』内でしばしば「正三位中将」「三位中将」と呼ばれていることに、彼をより人間的な側面から見せようという作者の意図をみることができる。つまり、頼朝が神格化されるほど、「中途の官」称を頭につけることで、重衡にはより「人間」じみた側面が要求されるのである。「正三位中将重衡卿」という執拗な呼称には皮肉も含まれているのだろう。

神によって平家を追討し、源氏の棟梁になることを決定せしめられた頼朝は、人間でありながらそれを超越した存在であった。清盛の庇護者は熊野権現であったが、天照大神に護られる頼朝は、清盛の「超然性」をはるかに凌駕する存在であったことがここで示されるのである。

頼朝にとって、かつて大きな脅威であった清盛亡き後、それに匹敵する平家の武将はなかった。棟梁宗盛が『吾妻鏡』で酷評されているのに対し、頼朝が好印象をもつのは重衡である。しかし頼朝が重衡を認め、南都大衆の要求にも応じないということは到底起りえない。平家は頼朝の手によって亡ばされなければならない。それが「運」を保持した人間と、手放さざるを得なかった一門の末路なの

である。

人間の力に支配されたのが重衡であり、また象徴としての平家一門であるとするれば、宗教的立場にある人間がそれを動かすことは容易であったろう。幸い、頼朝を頂点とした時代である。事実を改変して「物語」として新たに生み出すことも、ただの「人間」相手であれば、救済の主張もずっとたやすかったのに違いない。

注(1) 武久堅『平家物語 説話と語り』有精堂出版 一九九四年

(2) 山下宏明『いくさ物語と源氏将軍』三弥井書店 二〇〇三年

(3) 裏辻憲道「法然上人と重源上人」『重源叙尊忍性』吉川弘文館 一九八三年

(4) 渡辺貞磨『平家物語の思想』法蔵館 一九八九年

(5) 服部幸造『語り物文学叢説』三弥井書店 二〇〇一年

(6) 渡辺貞磨『平家物語の思想』法蔵館 一九八九年

横井孝「重衡物語の輪郭」『古文学の流れ』新典社 一九九七年

受贈雑誌(二)

香川大学国文学研究

学芸国語国文学

学習院大学国語国文学会誌

学習院大学大学院日本語日本文学

学

学大國文

香椎渥

金沢大学国語国文

漢文学解釈與研究

岐阜聖徳学園大学国語国文学

京都教育大学国文学誌

京都語文

京都大学國文學論叢

近畿大学日本語日本文学

金城日本語日本文化

近代

近代文学研究

香川大学国文学会

東京学芸大学国語国文学会

学習院大学国語国文学会

学習院大学大学院人文科学研究

科日本語日本文学専攻

大阪教育大学国語教育講座・日本アジア言語文化講座

福岡女子大学国文学会

金沢大学国語国文学会

漢文学研究会

岐阜聖徳学園大学国語国文学会

京都教育大学国文学会

佛教大学国語国文学会

京都大学大学院文学研究科国語

学国文学研究室

近畿大学文芸学部文学科日本文

学専攻

金城学院大学日本語日本文化学

会

神戸大学「近代」発行会

日本文学協会近代部会